

## ※5章13～15節の総括

●12節でパウロは割礼に代表されるユダヤ人キリスト者の律法主義者に対して、激しい、痛烈なことばをあげています。私たちはその意味することをよく悟れるように、御霊の助けをいただかなくてはなりません。パウロの福音の真理は神の啓示によるものです。まだまだその奥行きのすばらしさに届いているとは言えません。パウロはその福音の真理を伝えようとして「力を尽くして走った人」(2:2)であると同時に、ガラテヤ人にもそれを求めました(5:7)。「走る」とは「専心する」ことを意味します。聖書全体を通して、神の偉大な福音の奥の深さを知れる者になりたいものです。

●ところで、13節以降では、「兄弟たち」に呼びかけています。そこでは自由を与えられたキリスト者が如何に生きるべきかが問われます。そして、与えられた自由が愛へと押し出されています。以後、「肉」(「サルクス」σάρξ)と「愛」(「アガペー」ἀγάπη)が対立させられます。律法全体が「愛」という一語で全うされるという意味を考えながら、今回のわずか3節分を考えてみたいと思います。

### 【新改訳2017】ガラテヤ人への手紙5章13～15節

- 13 兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。
- 14 律法全体は、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という一つのことばで全うされるのです。
- 15 気をつけなさい。互いに、かみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの間で滅ぼされてしまいます。

### 【新共同訳】ガラテヤ人への手紙5章13～15節

- 13 兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。
- 14 律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。
- 15 だが、互いにかみ合い、共食いしているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。

## 5章13節

‘Υμεῖς γὰρ ἐπ’ ἐλευθερίᾳ ἐκλήθητε, ἀδελφοί: μόνον μὴ τὴν ἐλευθερίαν εἰς ἀφορμὴν τῆ σαρκί, ἀλλὰ διὰ τῆς ἀγάπης δουλεύετε ἀλλήλοις.

### 【新改訳2017】ガラテヤ人への手紙5章13節

兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。

●訳されていませんが、冒頭に「ガル」(γὰρ)があります。これは理由を示す接続詞ではなく、「まことに、確かに」の意味で、「確かに、あなたがたは召されたのです」。その目的は何かと言えば、「自由を与えられるために」です。原文は「エピ・エリュセリア」(ἐπὶ ἐλευθερίᾳ)で、「自由のために」の意。「メー」(μή)・「アツラ」(ἀλλὰ)は、「～とせず、かえって」の意味。「その自由を肉の働く機会としないで、(かえって)愛をもって(愛のゆえに)互いに仕え合いなさい(仕え合い続けなさい)」(現在命令形)ということです。ここにも「直接法+命令形」の構文があります。

●このパウロの呼びかけに心を留めてみたいと思います。「あなたがたは自由を与えられるために召された」のは、「愛をもって互いに仕え合うため」だということです。**この論理はどの視点から見ると結びつくのでしょうか。**この論理が成立するために、パウロは後の 16 節で「御霊によって歩みなさい」と諭しています。その前に、私たちは何によって自由とされたかを振り返ってみたいと思います。

●これまでパウロが論証してきたのは、以下のことです。

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 2 章 16 節

しかし、人は律法を行うことによってではなく、ただイエス・キリストを信じることによって義と認められると知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。**律法を行うことによってではなく、キリストを信じるによって義と認められるためです。**というのは、肉なる者はだれも、律法を行うことによって義と認められないからです。

●そしてパウロは「律法を行うことによってではなく、キリストを信じることによって義と認められるため」に、

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 2 章 19～20 節

19・・・私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。**私はキリストとともに十字架につけられました。**20 もはや私が生きているのではなく、**キリストが私のうちに生きておられるのです。**今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。

●パウロの言う自由とは、「私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰」とあるように、「信仰による主体的な、自発的な自由」です。それを換言するなら、イエシュアの十字架の死と復活によって、自分がイエシュアと結びつく、つまり**イエシュアとひとつ**(「エハーッド」**Τῆς**)**になる**ことでもたらされる自由(解放)なのです。とすれば、それは主にある者たち同士(兄弟姉妹)の関係においても「エハーッド」**Τῆς**とならなければなりません。なぜなら、それが神のご計画の目的にかなっているからです。「愛」とは神のご計画の実現に与り、それを喜ぶことを意味するからです。

●イエシュアの十字架の前の「大祭司としての祈り」と言われるヨハネの福音書 17 章を見てみましょう。そこには御父と御子とが「一つ」であるように、弟子たちも「一つ」であるように祈っています。また、それは御父と御子との交わりの中に弟子たちも入ることによる「一つ」です。この祈りの特徴は「一つ」

(「エハーッド」 Τῆν)です。なぜなら、これが神のご計画における目的であり、神の家の本質だからです。それゆえ、「**愛をもって互いに仕え合う**」ことが求められるのです。そして、それを可能にしてくれるのが御霊なのです。私たちの肉にはそれができません。なぜなら、肉は「罪と死の律法」に支配されているからです。

●ユダヤ人キリスト者の律法主義は、「罪と死の律法」に支配されているとパウロはみなしていました。ローマ書 8 章 2 節にある「律法」と訳されたギリシア語の「ノモス」(νόμος)は、新改訳改定第三版まで、「原理」と訳されていました。しかしヘブル語では「教え」を意味する「律法(トラー)」です。かつて「善悪の知識の木」から取って食べたアダムとその子孫(私たちも含めて)は「罪と死の<sup>トラー</sup>律法」に支配されています。ところが、「**罪と死の<sup>トラー</sup>律法**」(=この世の幼稚な教え、文字に仕える死の務め、消え去る栄光、律法主義、人間の言い伝え)に縛られている者たちが、「**いのちの御霊の<sup>トラー</sup>律法**」によって生きるように解放され、自由にさせられたのです。これがガラテヤ書という「信仰による自由」なのです。このことを、パウロはローマ書 8 章で詳しく語っています。

【新改訳 2017】ローマ人への手紙 8 章 2～11 節

- 2 なぜなら、**キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放した**からです。
- 3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。
- 4 **それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。**
- 5 肉に従う者は肉に属することを考えますが、御霊に従う者は御霊に属することを考えます。
- 6 肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。
- 7 なぜなら、肉の思いは神に敵対するからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。
- 8 肉のうちにある者は神を喜ばせることができません。
- 9 しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉のうちにではなく、御霊のうちにいるのです。もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。
- 10 キリストがあなたがたのうちに住んでおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、御霊が義のゆえにいのちとなっています。
- 11 イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられるご自分の御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだも生かしてくださいます。

●肉(「サルクス」 σάρξ)とは、パウロによれば、「罪と死の<sup>トラー</sup>律法」と一つになっている者のことです。これは最初の人アダムがサタンにそのかされて「善悪の知識の木」から取って食べたことによって、それとひとつ(Τῆν)になっている姿で、神に逆らう性質です。律法に従おうとする者は、「罪と死の<sup>トラー</sup>律法」の支配にあるために、自分には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないのです。「しか

し、肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしていただきました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。」と述べています。パウロの言う「自由」の積極的な面とは、「御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるため」なのです。

●「罪と死の律法」に固執する者は「<sup>トルラー</sup>肉に従う者」です。しかし、「いのちの御霊の律法」は神の律法を全うさせるのです。神のトルラーにおける「愛する」ということは、隣人と「一つになる」ことを意味します。つまり、御国の民が御霊によってお互いが「エハード」となることを意味します。御父と御子が一つであるように、御国の民たちも一つであることが神のみこころであり、神の喜びです。それは私たちの生来の力ではなく、「罪と死の律法」<sup>トルラー</sup>でもなく、ただただ御霊の力によるのです。

## 5章 14節

ὁ γὰρ πᾶς νόμος ἐν ἐνὶ λόγῳ πεπλήρωται, ἐν τῷ Ἀγαπήσεις τὸν πλησίον σου ὡς σεαυτόν.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 5章 14節

律法全体は、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という一つのことばで全うされるのです。

●原文の 14 節の冒頭には理由を示す接続詞「ガール」(γὰρ)があります。つまり、「なぜなら(というのは)、律法全体は・・・という一つのことばで全うされるから」です。「全うされる」と訳された語彙「プレーロオー」(πληρόω)は、「満たす、完成・成就する、集約する」の現在受動態です。つまり、<sup>トルラー</sup>律法全体はこの一言に集約されているということです。この「一言」の中身は、レビ記 19 章 8 節にある「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」となっています。原文では「**あなたの隣人を自分自身のように愛するようになる(未来形)**」ことによって**律法が満たされる**のです。特に、マタイの福音書には、「このすべての出来事は、主が預言者たちを通して言われたことが**成就**するためであった」というフレーズで、この「プレーロオー」(πληρόω)が頻繁に用いられています。この語彙は 8 6 回中、パウロは 23 回も使っています。しかし最初にこの語彙を使った人は、パウロではなく、「律法の成就者としてのイエシュア」です。

【新改訳 2017】マタイの福音書 5章 17節

わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく**成就**するために来たのです。

●「律法」と聞くと、法律とか、規則とか、守り行う、違反、罰則とかと理解されがちですが、「<sup>トルラー</sup>律法」には預言的側面があるのです。ということは、律法には神と神の民との契約規定があつて、その契約規定によって約束(預言)がなされているのです。つまり、神のご計画は、まず預言によって語られ、それが世

の終わりに成就されなければなりません。

## 5章 15節

εἰ δὲ ἀλλήλους δάκνετε καὶ κατεσθίετε, βλέπετε μὴ ὑπ' ἀλλήλων ἀναλωθῆτε.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 5章 15節

気をつけなさい。互いに、かみついたり、食い合ったりしているなら、互いの間で滅ぼされてしまいます。

●15節には逆説の接続詞「デ」(δὲ)があります。「エイ」(εἰ)は「もし・・・なら」の意味で、「もしあなたがたが互いにかみつ、食い合ったりしているなら」、「～しないように気をつけなさい」(「ブレポー・メー」 βλέπω μὴ の現在命令形)という構文となっています。「～しないように」とは、「互いの間で滅ぼされないように」ということです。新改訳は、あえて「**気をつける**」ことを強調する訳となっていますが、原文の流れとしてはこうなります。

「しかし、もしあなたがたが、互いにかみつ、食い合っているなら、互いの間で滅ぼされないように気をつけ続けていなさい。」

●パウロの言う文脈を考えると、ここは一般的な隣人愛ではなく、あくまでも一義的には「真理によってきよめ別わかった者たち」のこのように思われます。

●13節でもすでに「**その自由を肉の働く機会としないで**」と注意を与えていますが、15節でも、再度、「**互いの間で滅ぼされないように気をつけなさい**」と命じています。「罪と死の律法」の中で互いにかみつ合うならば、互いに「滅びてしまう」ことを警告しているのです。

●そこで今回は、「**御霊によって歩み続ける**」ことの重要性を考えていきたいと思います。